3.5.　パキスタンとガンダーラ（二〇〇二年三月）

あの同時多発テロから半年である。正直なところ「不安一杯」の単独出張だった。話が出た一月半ば、「断る口実はないか」と内心考えていた。公務はカラチの原子力発電所に海水淡水化施設を追設するプロジェクトへの支援計画検討会議だった。特に、北の国境に近い首都イスラマバードでの暴動情報も耳にしていたから緊張した。出張前に総務部安全係に国連現地事務所に手続きを依頼し、留意事項を貰って出掛けた。現在国連の安全規定で旅行が認められているのは、カラチ、イスラマバード、ラホールの三都市のみだった。私の旅程はちょうどこの三都市だった。相手方に全行程の同伴を要請した。

深夜到着のカラチ空港には出迎えが有り、取りあえず無事投宿した。常識不足が「不安」を増長した。膝まで伸びる白い民族衣装の男性がすべてタリバン、アルカイダに重なるのである。豊かな顎髭があるとオサマビンラディンに見えてくる。ターバンを含め、いでたちに違いが有るのだと耳にはしていたが自分の目には識別できなかった。翌朝現地の国連事務所に連絡をとると「一人ではホテルから出るな」との指示だった。が、とにかくカラチでの公務を終え、イスラマバードへ向かった。機体が近づくにつれ再び不安が高まった。同伴の相手と迎えの車でホテルに向かう。思ったより静かで整然としている。ここは政策的に作られた新首都である。子供の頃の学習ではカラチが首都だった。多少時間が有ったので街に散歩に出掛けた。相手と一緒に商店街を歩いたが、依然血圧は高かったのではないか。イスラマバードでの公務の合間にタクシーラという近郊の遺跡に連れていってくれた。ここでパキスタンに対する私の感情は一変する。

あのガンダーラへの入り口だった。予習不足で知らなかった。勿論ガンダーラまで足を伸ばす余裕はない。が、博物館で全貌の概要を見てから近くの遺跡に向かった。かって訪ねたポンペイにも似た街並みの遺構である。主要道路に面して店舗跡が並び、後方の路地周りに住宅、公共浴場等々。遠くに見える小高い丘に墓所らしき構築物が有る。「アショカ王」のモニュメントだと聞いて、世界史の授業に心は飛んだ。そう言えば、博物館にはこのアショカ王とかカニシカ王と言った耳に親しい展示物があった。もう一つ訪ねた遺構は、修行僧の「大学」跡だった。多くの卒塔婆、「本物」「レプリカ」の仏像、伽藍が保存され、修行した部屋、講堂、共同食堂などがあった。時間が残っていなかった。僅か一時間余りの駆け足で味わえるのはほんの一片である。「再訪したい」気持ちに襲われた。この気持ちはその後も消えない。「平和の時代」に戻ってきたい。一週間は欲しい、と助言する相手の声に耳が傾いた。

公務の最後はラホール。ここの博物館はガンダーラ遺跡の最大の展示場だと聞いて出掛けた。出張最終日の半日をここで過ごした。「断食する仏陀」とはかっての日本での展示会以来の再会だった。脇の土産物店で仏頭の石像を求めた。気のせいか道行く人ももはやタリバン、アルカイダには見えなかった。同伴者が街中の庶民的な食堂街を案内してくれた。さしずめ「飲み屋街」だが、もちろんアルコールはない。魚のフライを賞味した。悪くなかった。「生水と生サラダは禁物」と固く言われていたので、コカコーラで我慢した。

「印パ国境へのドライブ」も印象的だった。ラホールは仏教流布のルート上に近い古い街である。今も幹線道路が両国を結び、平時には公共バスが往来する要所である。夕方、車は小一時間で着いた。紛争中の現在、「関所」は閉鎖されている。「関所の総官」相当の人が「これから儀式が始まる、どちらが上手かあとで聞きたい」と謎めいて話して呉れた。両側に人だまりがある。間もなく歌声が高まり、手持ちの国旗を振り上げ、シュプレッヒコールがこだます。言葉が分らないのでデモ隊の罵り合いにも聞こえる

が、雰囲気から「交歓の場」であることは分る。国境閉鎖中だから、人の往来はない。が、両側で民衆が

唄の交換をし、国旗降旗の段取りは両側守備隊がリズムを合わせて対象的に同時進行する。国旗が降ろされ、両側で「万歳」とも言える締めくくりで約三十分の儀式が終わった。国境両側の民衆が相呼応してのエールの交換に、民衆は平和を欲していると肌で感じた。デリーを始めとする北インドの仏教遺跡も、このパキスタンのガンダーラや山々も訪ねたい地である。平和であって欲しいと思う。そんなときの「再訪」の気持ちが強まった。

全ての予定を終えて帰墺の途についた。ここからカラチまでが同伴なしの一人旅だった。カラチ空港で会う予定にしていた相手に会えなかったのでそのまま通関手続きに向かった。ところが、「出発三時間前までは外で待て」と係官から通関を断られた。二時間以上有る。公共の場で独りだけで過ごす、また不安が戻ってきた。「ぼんやり過ごせる安全な場所」を思案した挙げく、待合室を出て「警官詰め所」の前に陣取った。しばらくして、「外から見たら警官に拘束されているように見えるかな」と別の感情にとらわれた。通関口の前に移動した。「ここなら係官の視界内だし、時間がきたらいつでも入れる」と考えた。一時経つと「もう中に入れ」と見かねた係官が特別扱いしてくれた。ほっとした。

チェックイン、パスポートコントロールを済ませてビジネスラウンジに入った。実は「ここはもうパキスタンの外だからアルコールがある筈」と思い込んでいた。なかった。ホテルでは入手できたがあえてしなかった。二、三度経験した「禁酒後の酒の旨さ」を楽しみにこの一週間我慢していたのに、とがっかりした。しかし、数時間後には機上で久しぶりのワインに酔った。機体はドゥバイに寄ってからチューリッヒに向かった。